飛島に住んで思うこと

三年　齋藤　由里（昭和五七年度）

私の住んでいる島は、山形県でただ一つの離島「飛島」です。

この飛島では例年、夏になると「飛び魚」という魚が採れます。しかし、今年は全国各地で異常気象の影響で報道されているように、島でも同じように海水の温度が低く、そのため「飛び魚」の収穫がおもわしくありませんでした。

私の祖父は、暑い夏がやってくると、一番先に喜ぶ一人です。毎朝三時に起きて、漁に行きます。

「ジリー、ジリジリー。」　目覚し時計の音にはっとして目を開けてみると、それは祖父でした。起きるために夜目覚し時計をセットしていたのです。島の人でも目覚し時計を使うのかと思う反面、祖父も年老いたのだなあと感じました。

「じっちゃん飛び魚取り行ぐながあ。」、「んだ、まだ三時だはげ、眠ってろ。」「頑張っていっぺ取て来い。」と励ますと、祖父は嬉しそうにうなずき海に向って行きました。

祖父にとって、島での生活の中で一番楽しくて生きているのがうれしいそうです。島民としては、ごく当り前のことなのでしょう。「辛くとも魚の威勢の良い飛び方を見ると、たまらなく嬉しくなる。よしやるぞという気が出て来るんだ。」と、いつも私に語ってくれます。その時の祖父の目は輝き、黒い顔からは白い歯がのぞき、満面笑みを浮かべた祖父を見ながら、「おじいちゃんは海が好きで、海の近くでしか生きられないのだなあ。」と思った。

四月私は東京方面に修学旅行に行って来ましたが、飛島の緑、海の青さを忘れる事ができず、きらびやかな都会には、少しの間もなじめませんでした。飛島も都会化すれば、自然が破壊された夢のない島になるでしょうか。私は、そうなって欲しくない。祖父の笑い顔を失いたくない。窓の外には海があり、そこで楽しく働いている。そんな光景がいつまでも絶えることのない島であって欲しいと思います。

島の若者の多くは、都会に旅立ちます。それは、都会に喜びや楽しさを追い求めるからでしょう。それとも何かほしいものがあって出て行くのか。島には沢山の自然があり、その中で自由に生きて行くのも、人間本来よいのではないでしょうか。あらためて飛島のよい点を見つめながら、自分の故郷で一生「生きがい」を持ってくらして行けるような、開発をしていかなければならないと思う。

私たちにも近い状来、かかわって来るこの問題に、みんなで一緒に考えていかなければならないと思います。